

## (2) 第13回愛媛県国際理解教育研究大会 基調提案

おはようございます。本日はお忙しい中、本研究大会へ御参加いただき、ありがとうございます。第13回国際理解教育研究大会は、宇和島伊達400年祭の今年、ここ宇和島で開催されることになりました。壮大な歴史に思いをはせ、凜とした中にも穏やかで温かな文化を、今なお、育み続ける土地柄を感じながら、世界と、国際理解教育について考える1日になればと思います。

愛媛県国際理解教育委員会は、今から15年前、「愛媛県国際教育研究協議会」として、世界と日本の未来を背負う子どもたちをはぐくもうとする先輩方の努力によって発足しました。進み続ける国際化に向けて、世界の中の日本人として、しっかりと生きていくために必要なことは何かを考え、その育成に努力していこうという強い意志のもとに立ち上げられた組織です。第1巻の研究紀要の始めの言葉の中に、「自分たちのめざす教育は、国際理解という知的理解や単に国際交流や英会話などに留まらず、これらを基盤にしながら、国家や人種・民族を超えて、世界の人々が、互いに尊敬し合い、支え合って、平和で幸せな世界を築いていこうとする子どもたちを育てようとするものであります」というくだりがあります。そこから15年。その理念は、何ら変わることはありません。広く、大きな目標ですが、求めているものは、同じです。

でも、世界は刻々と変化のスピードを速めています。技術や文化は進化し、人々は海外に仕事や観光、あるいは、その他様々な目的で移動し、交流や、共生が進んでいます。その反面、世界における多くの経済的危機、あちこちで起こる紛争やテロ事件、情報技術の発達による新たな犯罪など、今、考えなければならないことは、たくさんあります。

日本も変わりました。経済的な豊かさを軸に、スポーツや芸術など多様な分野で世界に羽ばたく日本人が多く現れました。独自の文化への評価も高く、あらゆる面で、世界からの注目を浴びる要素は増え続けました。反面、近年の経済不調や政権の不安定さ、頻発する災害といった課題も多くあります。それまでの日本と、この15年間の日本は、確実に違うものになっています。そんな15年を経て今、言えることは、今がどんな状況であれ、先輩達が予想し、夢をはせた国際化は、確実に実現化してきたということです。外国の人と触れ合う機会は更に増え、携帯やスマートフォンの普及もあり、世界のことを知る機会がごく身近に、日常に存在しています。そんな中、自ら海外の地へ飛び出し、経済や文化の発展に力を発揮する人がいる一方で、海外で勝負するより安定や普通を求める、競争を好まない、といった風潮や、引きこもりや不登校など、人間関係づくりの苦手な子ども、大人が増えているという現実もあります。

教育界も、世界や日本の動静を追うように変化しています。子どもの学力低下を重大な課題とし、コミュニケーション能力の育成を大きく掲げて、全国統一テストの実施、道徳や外国語の教科化という手段を選び、実行しようとしています。コミュニケーション能力育成のために、言語を獲得する。それは、納得のできる方法であり、必要なことでもあります。しかし、言語獲得以前に、それを生かすに足りるベースを、必要な力を、身に付けていなければなりません。このベースの力が、国際理解教育の目指す力であり、それを身に付けるために必要なものが、本研究大会で長年にわたり提唱し続けている、**愛媛の国際理解教育、五つの視点**です。

### ○ 1つ目の視点、〈人権尊重〉

国際社会の一員として人間を認め人権を尊重する精神を育てる。これが全ての活動の基盤となります。

### ○ 2つ目の視点 〈自己表現力・コミュニケーション能力〉

他者の考えや思いを受け止めながら自分の考えや思いを表現し、伝え合おうとする態度や能力を育てる。この原点には、「伝えたい」という思いがあります。

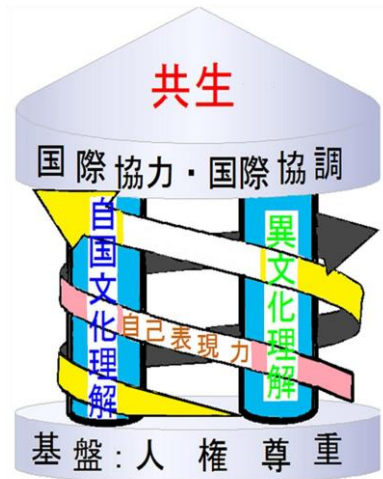
### ○ 3つ目、4つ目の視点 <自国文化理解><異文化理解>

ふるさと愛媛や日本の生活や文化のよさを体得させ、日本人としての誇りを育てる。異文化や異なる文化をもつ人々との相互理解を図り、お互いを受容し合い、価値観を尊重し合う態度や能力を育てる。

ここまでの4つの視点は、「世界」や「外国」という概念ではありません。すぐ近くにいる友達、家族、全ての人に対してです。自分以外の人全ては異文化。「隣にいる人が異文化」なのです。

### ○ 5つ目の視点 <国際協力・国際協調>

国際社会の一員として、よりよい人間関係をつくらうとする態度や能力を育てる。この段階の概念は、自分の近い世界から地球規模に広がります。隣にいる人、遠い国から来た人、様々な文化が当たり前で共存し、認め合える、「共生」が、国際理解教育の最終的な目標です。



愛媛の国際理解教育5つの視点

本研究大会では、15年間、毎年たくさんの方々に参加を頂き、世界の動きと、それに伴いグローバル化する日本社会の動き、そして学校現場の動きを見つめながら、国際理解教育の在り方とその取組を提示してきました。過去3年間においては、研究主題を「感じよう 世界と日本 見つめよう 国際理解教育」とし、子どもたちが世界とつながっていくために必要な「コミュニケーション能力の育成」を目指して、コミュニケーションのスタートである、「関わる力」の育成を目指してきました。

今、国際理解教育に求められること、それは、グローバル人材育成に向けての言語習得のみならず、共生に向けての動きの根底となる、「関わる力」そしてその後に「動く力」の育成です。

「動く」の中には、感じる、思考するといった心的動きや、行動するといった物理的な動きなど様々な過程が含まれます。子どもたちが将来その力を発揮できるように、素地を作るのは外国語活動の中だけではありません。日々の教科学習、道徳、特活、総合的な学習の時間、全ての教育活動の中で、それができるのが、国際理解教育です。国際理解教育の理念を、「涵養」させる必要があります。「涵養」という言葉は、第5回の宇和島での本研究大会の基調提案の中で、用いられた言葉です。「水が自然にしみこむように、少しずつ、ゆっくりと養い育てる。」全ての教育活動の中で、ベースに先ほど提示した「5つの視点」をしみこませることが、国際理解教育を前に進ませる力となるのです。

今年度は、国際理解教育の理念の「涵養」をベースに、今まで同様「世界」とコミュニケーション能力の原点である「関わる力」、そして新たに、そこから「動く力」をキーワードに、一歩前へ、進んでいこうと思います。

冒頭に登場していた1枚の写真。これは、今の時点で私が「最も素敵でコミュニケーション成立の場面」として、ことある事に思い出す人々です。

昨年夏、西アフリカ、セネガルでの1枚です。旅の途中、知り合いの家で晩ごはんの準備をしていたところ、非常にご機嫌な二人の男性とその内の一人の息子が訪ねてきました。その日はクリスチャンのお祝いの日。国民の95%がイスラム教徒のセネガルですが、お祭り事や楽しいことは宗教に関係なく共有します。食事時に知らない人がやってくるのはアフリカの相互扶助社会では普通のことなので、笑顔でウェルカム。にぎやかな食事が始まりました。みんなよくしゃべり、食事がみんなに行き渡るように考えながら気持ちよく食べ、笑いの絶えない時間。



中でも5歳になるという客人の息子は、生まれて初めてテレビを見たらしく、興奮しながらみんなに話し掛け、場を一体化させる、子ども独特の貴重な存在でした。フランス語、ウォルフ語、部族語が飛び交う中、私は自分の分かる言葉を拾い、場の雰囲気と流れを感じ、時折英語で説明してもらいながら、異文化の集合を楽しんでいました。ただ、やってきた客人のうちの一人が、始めからものすごいオーバーアクションで、表情もこれでもかというほど豊かに話しているのに少し困惑していました。そんな私の様子を察してか、しばらく経ってから隣にいたセネガル人が小声で「実は、誰も彼の言葉が分からないんだ。」と。驚く私に、彼は隣国ギニアビサウの人で、用があってセネガルに来ており、たまたま出会った知り合いと祭りを楽しんでいること、彼の話す言葉はススという部族語でウォルフ語とは全く異なること、などを早口で教えてくれました。なるほど、と納得していると、ノックの音が。やってきたのは大きなお腹を抱えた一人の女性でした。すかさずギニアビサウの男性が駆け寄り、なにか話した後、彼女はいすに座りました。数分後に分かったことは、彼女はその男性の奥さんで、男性と息子が行き先を告げずに出掛けてしまったので、村中を長いこと探し回っていたということでした。疲れていたのでしょう。安心したのでしょうか。残り少ない食べ物をすすめても何も言わず、でも場の雰囲気を乱すことなく、座っていました。どうにも気になって仕方がなかった私は、思い切って自分の飲んでいた飲み物を彼女にあげてくれと、隣の人に渡しました。何人かの人の手を経て彼女にそれが行き着いたとき、彼女が急に立ち上がり、みんな、何事が起きるのかという驚きと不安で、初めて場がシーンと静まり返りました。立ち上がった彼女はゆっくりと歩き出し、どうも私の方に向かって来ています。飲みかけなんて失礼だったかな、妊婦さんに配慮が足らなかったかな、などとたくさんの思いが浮かび、まさに緊迫の約1分間。そして、私の前に立った彼女は、無言で私の両ほほにキスをし、またゆっくりと自分の席に戻っていきました。息をのんで見守っていた周りの人たちは皆、笑顔。すかさず隣のセネガル人が、「彼女はきみに最大限のありがとうを伝えただよ」と。素敵な時間でした。

この時間の中に私が見たものは、人々の「分からない」ということに付随する「分かってもらおうとする意欲」「分かろうとする意欲」「聞く意欲」「考える意欲」「察する努力」。そして、言語の必要性あるいは不必要性でした。よく考えれば、まさに愛媛の国際理解教育の5つの視点が、全て網羅されていたように思います。

コミュニケーション能力の育成のために、言語を習得させる努力をはじめた日本。でも、言語が役に立たない場合にも、コミュニケーションがとれる力。そこから相手を認めたり、受け入れたりする力……。大切ではないでしょうか。分からないから関われないではなく、分からないから関わる。英語が役に立たないことはあっても、国際理解教育の理念が役に立たないことは、ありません。実際に、日本にいて今後共に生きていく人々の多くは、母語として英語をもたない人たちです。根本の前向きな関わりへの姿勢と、そこから思考し、行動する姿勢こそ、生きて働く力になると思います。さらに、対「人」だけではなく、分からない問題、難しい状況といったあらゆる困難に対して、前向きに関わり、挑戦し、自分の力で解決しようとする姿勢、つまり「動く力」にも、つながるのではないのでしょうか。

その力の獲得のために私達は何をするのか。

子どもたちが世界とつながりを見付け、体感し、異文化である友達やたくさんの人との関わりの中で学び、成長する環境を、刺激と感動をもって作り上げることです。世界という、未知の、限りなくおもしろいものの情報を提示しながら。外国語活動、中学校の英語、総合的な学習、特別活動…、縦も横も、全てをつなぐことができるのが、国際理解教育です。

本日御講演いただく久保田あずさんは、宇和島の地が生んだ、関わる力と動く力の持ち主です。たくさんの方の困難も、あったことでしょう。きっと、アグレッシブで多様な経験をお聞きすることができると思います。また、実践発表においても、日々の教育活動の中で、地道に、まさに国際理解教育の理念を涵養させるべく取り組んでおられる先生方から、学べることと思います。世界と日本を感じ、愛媛、宇和島を感じながら、自分という世界にたくさんの方の刺激を受け、感動し、一歩前に進む、「動く力」を得ることのできる研究大会になることを願い、基調提案といたします。今日一日、よろしくお願いいたします。